

書評：クルーグマン/ウェルスの『ミクロ経済学』

市野 悠

November 1, 2008

タイガー・ウッズが大学を中退した根拠とか、投票に行くべきか否かとか、マイクロソフト社の錬金術のからくりとか、ヨットに税をかけるとうなるかとか…。この本に散りばめられたコラムのテーマを列挙するだけで経済学がいかにか現代人にとって身近で興味を惹かれるものかわかるだろう。にもかかわらず、私たちは驚くほどこの領域に関して無知である。その原因は様々だが、長くて退屈な教科書を読むという手間をかけたくないという点に関してはこの本が解決してくれるだろう。これは教科書ではない。一般読者のために書かれた**常識集**と言ったほうが適当で、大きな危険もはらんでいるがそれは後回しにして、先に魅力を伝えることにする。

表紙の裏に「はじまりの物語」「経済学を使ってみよう」「ちょっと寄り道」のリストがあるが、本書の目玉はこれらのエッセイがつくっている雰囲気と言え。ミッキーマウス保護法からスターバックスの経営戦略まで豊富な事例をよく観察すれば、それぞれの背後にある経済学の原理が見えてくるというしくみになっている。日本も資本主義経済で動いている国だから、話題がアメリカなのを気にしなければ自分の周りの景色と結びつけるのは容易だ。各章の冒頭に配置された「はじまりの物語」では“If you haven't hooked them by the third sentence, then you've lost them.”すなわち「第3センテンスまでに読者をひきつけなければ、逃がしてしまう」という商業ライティングの鉄則が理想で終わらずに完璧に実行されているし、「使ってみよう」では学習内容の定着が図られる。コーヒーブレイクの「寄り道」ではちょっと視点を変えて映画とか日常

生活とか歴史とかから例をひいてあるので、多角的な理解をする助けになる。つまり読者に媚びる姿勢を徹底していて、後述する目的からしてそれは必然的に導かれるべき態度である。

1章は重要用語の説明、2章から3章は中学・高校で教わるような簡単な経済モデルを使ったウォーミングアップなので特筆すべきことはないが、4章から突然オトナな話題になる。

家庭を一步出ると外気が凍みるというのは普遍的と思うが、ひとつ気づくのは世の中には不快なことが溢れているということだ。そのうち(金銭的に限らず)経済学的(あるいは物理的)な理由からくる心理的負担は割合から言って非常に多いと思う。ひとことで言えば「**効率的でないこと**」からくる負担であり、多くの場合心理的を超えて実害を被る羽目になる。例えばこの章で提示される家賃の上限価格統制は「**不愉快な副作用**」をもたらすのだが、図を見れば一発で事の本質に到達する。(政治)制度はしばしば経済学の原理を無視した拘束を系の外からかける!というわけだ。そして「正直者が馬鹿をみる」ブラック・マーケットの例まで臆せず出してしまうあたりが、著者らの善悪観を反映していると言ってよいだろう^{*1}。

5章以降も需要と供給のバランス、あるいは平衡点付近の線形応答とでも言うべきものをみ

^{*1}この正反対が進化論・生態学の正統派?で、彼らの主張を素朴に受け入れようとする(大部分はよいとしても、思想の一部に)信仰めいたものを感じて、いつも居心地悪い思いをするのは私だけだろうか。

ている。ただし注意しないといけないのは、平衡系の熱力学と違って自分の行動に対する系全体からの feed-back が陽にかかり、それを問題にすることもあるという点である。ここはきちんと物理的な状況を特定しようとしたり、定量的に話をすすめようとするとな大変な困難に陥るはずだが^{*2}、定性的な議論と概念図に限定することでうまく回避している。そしてそれは私たちの直感と一致した結論を導く。7章で出てくる限界費用逓増・限界便益逓減、あるいは10章で出てくる限界効用逓減などの法則は一貫して**限界分析**（7章）という直感的にも理解しやすい手法の応用であり、用語法さえちゃんと理解すれば全体像がすぐに見えてくる。それ以上のことはほとんど出てこないで、このあたりはスピーディーに処理できるだろう。

13章までは完全競争を仮定しているが、この章ではじめて効率性一辺倒に対する疑念が掲げられ（「効率性とは目標を達成する方法についての概念であって、何が目標であるべきかについては何も教えてくれない」）、その後の議論の鍵となる**公平性/公正性**が導入される。こうなるとこれまで注意深く避けてきた**価値観の問題**に片足を突っ込んだストーリー展開になるわけで、現実的ながらもどかしい気分にもなるだろう。14章からは話がガラッと変わり、生産者の数を振っている。これは熱力学から力学系への移行とみることもできて面白いし、ページ数の割り

^{*2}そもそも真面目に考えればパラメータ空間の次元の桁が違う。3変数で驚異的にうまくいってしまう熱力学に対し、こっちは状況によって変数の取り方がコロコロ変わり、センスが求められる。この点を根拠に「経済学は無意味だ」と言う人もあるだろうが、それは多分的外れで、こうした混乱の解消はマクロな結果から性善・性悪は議論できないということを双方がきちんと押さえているかどうかにかかっている。したがって統計物理屋（すなわち N 粒子系の自由度 $6N$ を3に縮役してしまう人）の私からすると経済学のやっつることは王道に見えるし、意識的かどうかはさておき、クルーグマンのようにその辺に注意して議論をすすめることができている場合には信用していると思う。もっと些細な問題点としては、非平衡の恐ろしい問題（交通渋滞とか）を平気で持ち込んでしまうということがあって、ここに関しては議論の余地があると思う。

当てから想像できるように内容も詰まっている。15章の寡占ではゲーム理論を扱っているが、この辺までくると日常目にするニュースの裏側を見ているようで、純学問的な興味だけでは閉じないのだが、まさに現役経済学者の本領発揮というところで、生き生きとした説明が楽しめる。17章は著者の専門である**国際貿易**のミクロな立場からの基礎づけが簡潔にまとめられている。古典的な基礎を外れることはないで、これまでの議論で出てきた概念（取引利益と比較優位）だけを使って説明が完結している。貿易によって消費が（自給自足の限界を超えて）拡大されることの説明は素人にとっては目から鱗で、生産の得意・不得意を差異化するだけで双方に利益を生むという議論は世界観に修正を加えることうけあいだ。残りの章は徐々に各論めいてくる。保険・環境問題・公共政策・ネットワーク上の経済学といった現実的興味をそそる比較的新しい話題が続くので、一気にフィニッシュしてしまおう。

新鮮な題材、あるいは文化を超えた日常風景を出し惜しむことはない。ある例については一回きりだが、別の例については光を当てる側面を変えてくりかえし提示してくる。この冗長性を我慢するのとトレードオフで読者の理解は誤解のない確実なものになるだろう。各章の形式は統一されているように見えて、実はまったくそうっていない。内容の密度とか例の使い方とかは自由奔放で、はしがきにあるように「経済学のメカニズムよりもむしろ経済学の目的—世界をもっと深く理解すること—に書き方を選ばせるという原理^{*3}」にもとづいており、注意深さを求める概念は注を含めると三度以上、しかも離れたページに出すという配慮がしてある。

^{*3}実はこれに関して、はしがきの最初でクルーグマンがオーウェルのエッセイを引用している。この引用元は昔私も感銘を受けた文章で内容までよく覚えていたので、オーウェルファンとしては即取り込まれてしまったという次第である。

まとめると、アメリカ的な分厚い教科書、あるいは大衆読み物としての到達点は非常に高く、これ以上は望めないほどの分かりやすさが実現している。一方でアカデミックに使おうとすると、現実のデータはほとんどないし、概念は明快でも細部を問い始めるとキリがない。いずれにしても時間をかけて必死で読む本ではないので、野次馬根性で気軽に経済学の本質をつかんでいけばいいのではないだろうか。普段から自分の置かれた環境を気にかけて分析しているような人にとっては、ほとんどが再確認の作業になると思う。それを目的としたかなり荒っぽい読み方にも耐えるので、敵の陣容を把握しておきたいとか、経済学の勉強に費やす時間はないけど役人に威張られるのは癪だとかいう不純な動機でも苦痛なく読み進めることができるだろう。既存の理論に対する過信がないのもクルーグマンの魅力だと思う。分冊になっている『マクロ経済学』へ、さらには経済学専攻の学生に絶賛されている Krugman/Ostward ヘステップアップするための踏み台として利用するのもいい。

最後にうるさいことを言う。「賢く生きたい」と誰もがそう思っている状況を仮定しよう。注意しないといけないのはここで英語の *cleverness* あるいは *intelligence* について言っているのか、*wisdom* について言っているのかという点である。経済学は前者について雄弁で、この本で世界の半分を知るきっかけはつかめると思うが、残りの半分については何も教えてくれない。本書を読みとく際に注意すべきはこの一点で、単純さ・分かりやすさとひきかえに、人間世界に何を仮定しているかということに常に意識し続ける必要がある。あとは価値観の問題になるが、私の場合は読後あらためて「彼らに思考の半分以上を奪われないように、断固死守するのだ」と心に誓ったことを告白しておく。

以上、東洋経済新報社の出している日本語訳初版（2007年10月発行：4800円）に基づいて

書いてきた。情報が古くなってしまうことは承知の上で、他の版についての情報を現時点でまとめておく。まず片割れである『マクロ経済学』の日本語訳は2009年春出版予定とのことである。日本語は堅いが不具合はない。こっちは安いのが取り柄である。一方、図書館で手に取ってみて分かったのだが、原書も捨て難い。ただしこっちは分冊で買うと高いと不評である。Macroの1-5章や国際貿易の章がMicroとかぶっていることを考えると合冊のEconomicsを買うのが正解と思う。アメリカンな教科書の例に漏れず、ページ数がかさばるのが難点。さらにマイナーチェンジの入ったMicro第二版も英語では既に出版されているので、選択には迷ってしまうかもしれない。

日本語版は3色刷りでレイアウトにぎこちなさを感じるのに対し、オールカラーの原書⁴は大変綺麗な造りになっている。そして時代を反映する写真・イラストの類（The Economist 読者ならお馴染み KAL's cartoon を含む）は（おそらく著作権のせいで）日本語版で全削除の憂き目に遭っている。あとクルーグマンが平易でリズム感のある英語を使うことも忘れてはいけない。翻訳で??な箇所も英語で見るとjokeだったり言葉遊びだったり凄まじい皮肉だったりするので、英語で高速読みする自信のある人は原著で読んでみることをおすすめする。また原書では、出版者のWorth Publishersからの特典がつくようだ。詳しくはwebsiteをみてほしい。いくつかの章のサンプルもPDFで置いてある。

この文章に先立って、三井健太郎さんは主に経済学不信に関する長時間の議論につきあってくれました。あと私がクルーグマンをはじめで知ったのは山形浩生さんの翻訳業(cruel.org)でした。感謝します。

⁴ノーベル賞を獲得の前から金表紙であった…。